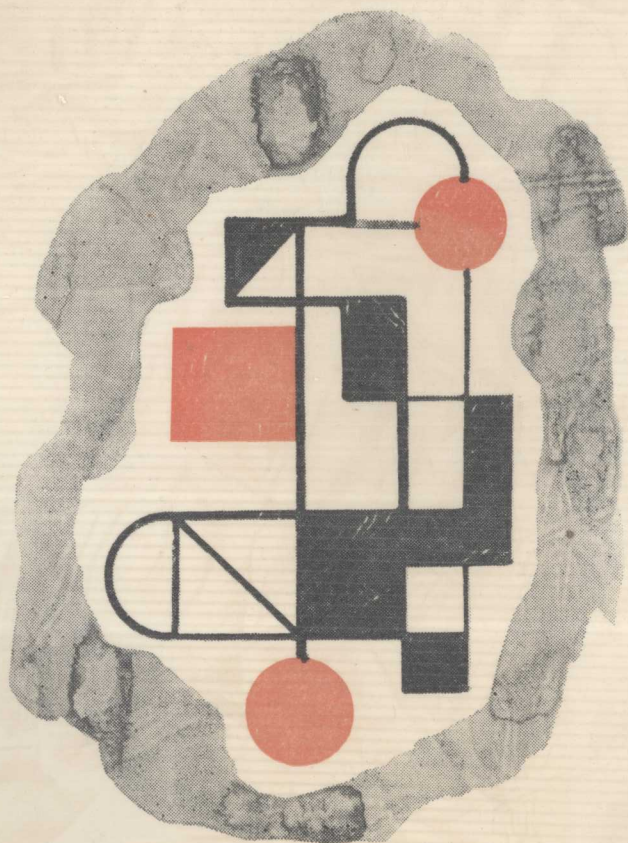


言語の構造

音声・音韻篇

——理論と分析——

柴谷方良／影山太郎／田守育啓



くろしお出版

柴谷方良（しばたに まさよし）1944年，上海生れ。カリフォルニア大学（バークレイ）卒，同大学院修了。Ph. D. 南カリフォルニア大学言語学科助教授，準教授を経て，現在，神戸大学助教授。著書『日本語の分析』（1978年，大修館書店）

影山太郎（かげやま たろう）1949年，神戸市生れ。大阪外大卒，同大学院・南カリフォルニア大学大学院修了。Ph. D. 現在，大阪大学助教授。著書『日英比較 語彙の構造』（1980年，松柏社）

田守育啓（たもり いくひろ）1946年，大阪生れ。京都外大卒，南カリフォルニア大学大学院修了。Ph. D. 現在，神戸商科大学助教授。

© M. Shibatani
T. Kageyama
I. Tamori

言語の構造 — 理論と分析 — 音声・音韻篇

定価 2,000 円

1981年6月10日 第1刷発行

著 者 柴 谷 方 良
影 山 太 郎
田 守 育 啓
発行所 くろしお出版

101 東京都 千代田区 神田小川町 3-24

でんわ 03-291-3557

ふりかえ 東京 9-31301

くみ：オール企画 すり：モリモト印刷

せいほん：大洋社

ページおち，ページみだれの本はとりかえます。

言語の構造

音声・音韻篇

——理論と分析——

柴谷方良
影山太郎
田守育啓



くろしお出版

は し が き

本書は言語学において密接な関係にある音声学と音韻論の入門的解説書である。本書とその姉妹篇『言語の構造(意味・統語篇)』によって、言語構造に関する中心的課題を解説しようとするものである。

入門書はふつう一般教養としてその分野の知識を得ようとする読者と、その分野をこれから専攻しようとする読者との両者を対象としている。本書もそれを念頭に置いたが、特に言語資料の観察、分析および記述の過程を通して理論を説くという形式を採った。

現在入手できる言語学の入門書の多くは、誰がいつどのような研究をしたかという言語学史的なものと、音声学、統語論、社会言語学と、言語学の諸分野を俯瞰図的に述べるものとに大別される。これらは、言語学とはどのような学問分野であるかということのを浅いが広く紹介するいうところに主眼を置いて、一般的に考えられている入門コースの所期の目的を達成していると考えられる。しかし、このような入門書の問題点は、読者をもっぱら受身の態勢に置くということと、言語学の概要は判っても、言語の本質に触れる機会が十分に与えられていないということである。

本書は、教養としての言語学も言語現象の観察を主体としたものであるべきだという考えのもとで書かれた。ソシュール、ブルームフィールド、チョムスキー等著名な言語学者の名を覚えるよりも、また各部門の研究対象を表面的に知るよりも、言語現象の観察、そしてその分析・記述を体験し、理論的問題点に自身が直面しながら言語の本質、「言語学の実際」に対する認識を深めることによってこそ、本当の意味での教養が身につくのではなかろうか。孔子の名は知

らなくても、論語は読まなくても、礼節をわきまえた人間をまず育てることが大切であるのと同じ道理である。

チョムスキーによって生成変形文法理論が提唱されて以来、理論的研究が多くの入門者を言語学にひきつけた事実は特筆すべきことである。理論的研究の発展に伴って、入門書も理論中心的なものが出まわるようになった。この種の、ある特定の理論を前面に押し出した入門書もまた、ある種の危険を含んでいる。まず、このタイプの入門書は一般的に分析資料が貧しく、特定の理論の解説に都合のいい資料を散発的に提供しているにすぎないものが多い。もちろん、特定の理論の優れた点を強調しているのであるから、その理論が素晴らしいければ素晴らしいほど、読者は魅了され、理論の背景となるべき言語事実を理解、吟味することなくその理論を盲信する恐れがある。理論的行き詰まりが語られる今日、理論的展開を担うべき新学徒を養成する入門期には、不完全な理論をたたき込むよりは、理論の根底となっている現象を多く観察させ、現在の理論的枠組みを使って分析・記述していくうえでどのような問題が浮び上がってくるかを理解させる方が、より効果的な教育であると考えられる。言語学を志す者に対してこそ、論語読みの論語知らずを戒めなければならない。

以上のような考えにもとづき、本書は読者に言語学を実際にやらせる、分析・記述中心の入門書として書かれた。また、特定理論の詳説にとらわれず、一般的に広く受け入れられている理論的概念を対象にし、それらの基礎となっている現象及び分析上の考慮の解説に重点を置いた。

本書の理論的背景は、アメリカ構造主義言語学と生成音韻論にまたがっている。特に音韻論では、構造主義言語学の中心的課題であった音素論、そしてその分析手順を論じるとともに、生成音韻論が主に対象とする形態素交替に関する問題を広く取り扱った。音韻現象を正しく理解し、理論の発展を期するためには、音素論とか、生成音韻論とか、1つの理論に固執せず、のびやかな理論的態度を保たなければならない。現存するものへの妄執からは何も新しいものが生まれない。

一般教養として言語学を学ぶ読者にも，また言語学専攻を志す諸君にとっても，本書が言語の本質を探るうえでの手引きとなれば幸いである。

昭和56年4月

桜満開の六甲山麓にて

柴谷方良
影山太郎
田守育啓

目 次

はしがき	3
------------	---

総 論

1. 「音声学」と「音韻論」	11
2. 文法における音韻論の位置	15

第1部 音 声 学

第1章 音声記号と音声表記	21
練習問題	31

第2章 音声器官と発声の機構	33
練習問題	40

第3章 子 音	41
1. 調音の仕方	41
2. 調音の位置	44
3. まとめ	49
練習問題	52

第4章 母 音	55
1. 舌の高低位置	57

2. 舌の前後位置	57
3. 舌の「はり」と「ゆるみ」	59
4. 唇音化（円唇化）	60
5. まとめ	61
練習問題	63
第5章 超分節素	66
1. 音調	66
2. イントネーション	69
3. 強勢	70
4. 音の長さ	71
練習問題	73
第6章 二値的素性方式	74
1. 子音の弁別的素性	75
2. 母音の弁別的素性	81
3. まとめ	85
練習問題	90
参考書について	92

第2部 音 韻 論

第1章 序 論	95
1. 音韻的対立	95
2. 個別的事象 — 音素の設定	98
3. 一般的事象 — 規則の設定	101

第2章 音素論	105
1. 音素分析の方法	105
2. 評価と選択	110
練習問題	113
第3章 音類 ― 類似する音のグループ	115
1. 音韻環境としての自然音類	115
2. 音韻入力としての自然音類	123
3. 原音素	131
練習問題	140
第4章 音素分析の実際	143
練習問題	164
第5章 形態音韻論	167
1. 語の構成	167
2. 形態素交替	174
練習問題	181
第6章 各種の音韻現象	183
1. 中和	183
2. 脱落	191
3. 挿入	196
4. その他の音韻現象	201
5. 規則の順序づけ	218
練習問題	225

第7章 超分節素現象	229
1. 超分節素の規則性	229
2. 形態素交替と超分節素	234
練習問題	252
第8章 音韻制約と余剰規則	256
1. 音韻制約の種類	257
2. 制約のレベルと範囲	262
練習問題	270
第9章 音韻論の諸問題	271
1. 記述および理論の妥当性	271
2. 内的根拠による正当化	275
3. 外的根拠による正当化	277
4. 理論的根拠による正当化	284
5. その他の問題点	301
6. おわりに	313
練習問題	315
参考書について	316
付 録 1. 子音表と母音表	318
2. ヤコブソン, ファント, ハレによる 弁別的素性行列	319
3. チョムスキーとハレによる弁別的素性行列	320
4. 見出し語索引	321

総論

1. 「音声学」と「音韻論」

言語構造の解明において、音声および音韻体系の研究はもっとも基本的かつ不可欠なものである。このことは、世界の言語のすべてが音声を通してその言葉としての機能を果たしているという事実と表裏の関係にある。文字文明の発達した社会に生活する我々にとっては、一瞬にして消え去る音声よりも文字（または活字）の方がもっと重要な言語要素のように思われるが、文字はその言語の音韻体系を基に作り出された二次的なものにすぎない。このことは、まず、世界の言語の現状を考えてみると明らかである。3,000 から 5,000 あると言われる世界の言語を見渡すと、文字を持っている言語はほんのわずかであるということが判る。例えば、南北両アメリカには何百という数の言語がアメリカインディアンその他の土着民によって話されているが、これらのほとんどのものはいまだに文字を持っていない。

我々に身近かな言葉では、アイヌ語などは文字を持つことなしに死滅しかけている言語である。また、時代をさかのぼれば、日本語でも奈良時代に中国の文字つまり漢字を基に万葉仮名による表記システムが開発されるまでは、文字は存在しなかった。もっと時代をさかのぼれば、同じような状況が中国語やアルファベットを使うヨーロッパの言語についても見られる。このように、言語の表出機能を担う基本的な要素は文字ではなく、音声なのである。

音声学（phonetics）とは、この言語の基本的な要素である音声をいろいろな角度から研究する学問で、細かく言うといくつかの専門分野に分かれる。まず、**調音音声学**（articulatory phonetics）は、音声がどのように作り出され、個々の言語音が調音の観点からどのように特徴づけられ、分類されるかを研究する。音声器官によって作り出された音声は空気の振動、つまり音波となって伝わるのであるが、違った音は違った物理的性質を持っている。**音響音声学**（acoustic phonetics）とは、このような音声の物理的性質の解明に主眼を置いた研究分野であり、コンピューター技術の発達とともに近年目覚ましい発達を遂げている。音波は人の耳に達し、鼓膜に振動を与え、聞きとられるのであるが、音波と聴覚の関係を研究する**聴覚音声学**（auditory phonetics）という分野もある。

もちろんこれら音声学の諸分野はお互いに関連性を持っている。言語音は音声器官によって作り出され、調音の違いが音波の物理的違いとして現われるのである。そして、音波の物理的な違いが2つの音を違った音であると聞きとらせるのである。音声学の主要分野の関連性をこのように見ても判るように、調音音声学の対象となる音声の調音はもっとも基本的な音声学の課題である。また、歴史的に音韻論ともっとも密接な関係にあるのも調音音声学である。従って、本書でも調音音声学に焦点を絞って音声学と音韻論の関係を説くことにする。

音韻論について略述する前に（調音）音声学の目標というものについてもう少し具体的に述べておこう。我々が現実には耳にする音声は一連の異なった波形を持つ音波である。従って、例えば「花」という語を伝える音波を記録しても、音波のここからここまでが hana の h で、ここからここまでが a に相当するということのように厳密に区切れるものではない。同じように、発声・調音に関しても舌その他の音声器官の動きは流動的かつ連続的なものであって、はっきりと hana の4つの音に相当する部分に区切ることはできない。つまり、物理面においては、或る一定の時間続く音声を独立の言語音の連続体であると見做すべき根拠はないのである。しかし、物理的な側面を離れて、言語システムという観点、

すなわち言語話者の立場から見ると、「花」を伝える音波は h, a, n, a という 4 つの単位の個別言語音の産物であると認知される。このことは「花」と「旗」の 2 語を与えられた場合、前者は hana, そして後者は hata であり、両者の違いは 3 番目の音 n と t だけであると、個々の音を指摘できるということからも理解される。

また、hana と hata の例から、言語においては同じ音 (h, a) が同じ語の中で、また違った語に繰り返し使われているということが判る。このように、音声には連続的な物理面と言語システムにおける個々の言語音としての面との二面性が備わっている。調音音声学はこの 2 つの側面を発声・調音の立場から関係づけようとする分野であって、具体的に言えば、「花」や「旗」その他の語に繰り返し起こる言語音 h や a がどのように発声・調音されているかを解明することを第一の目標としている。

個々の言語音の調音を研究していくと、発音記号で h とか a とか表わされている個々の言語音はそれぞれ全く異質のものではなく、何らかの調音上の類似性があるということが判る。調音音声学では、まずこれらの類似性および相違点を明らかにしなければならない。次に、これらの点を明示的に記述するために、個々の言語音の内部構造の表示形式、および同類のものと異質のものとを区別できる分類体系を作り上げなければならない。我々は本書の第 1 部において、調音音声学のこれらの目標がどのような過程を経て達成されるかを順次検討することになる。

一方音韻論 (phonology) というのは、言語において言語音の違いがどのように意味の違いを表わすのに活用されているか、また個々の言語音が語構成においてどのように配列・分布されているかを研究の一端とし、各種の音がどのような環境でどのように発音変化を起こすかという問題を中心に音声と語その他の文法単位との関わり方、つまり音韻体系を記述・説明しようとする学問である。

音が違えば語の意味も違うということは、先の「花」と「旗」の例でも見た。

hana の n と hata の t との違いがこれら2つの語の意味を区別する働きをしているわけであるが、異なった音が常にそのような意味を区別する働きをするかという、そうでもない。例えば、日本語の m と n は母音の前に起こる時には「アメ」ame と「姉」ane に見られるように意味を違える働きをする。しかし、他の子音に先行する時には、そのような働きはない。「判」と hanto と「判も」hammo (同様に「判の」hanno と「判ばかり」hambakari) には各々 n と m が起こるが、これらの例では n, m の発音の違いは意味(判)の違いを生じない。これはどうしてかということ、n とか t の前で起こり得る鼻音は n に限られていて、m とか b の前に起こり得る鼻音は m に限られているからである。つまり、異なった音がどのような環境においても意味の違いを表わせるかということ、そうではないということである。音韻論ではこのような音の違いと意味の違いの関係を体系的に究明しなければならない。

上の「判」と「判も」の例でも明らかなように、同一の語が環境によって違ったように発音されることが往々にしてある。このことは次の例の「いち」の発音を比べても判る。

it <u>i</u> (1)	is <u>se</u> n (1千)
it <u>to</u> (1頭)	i <u>ff</u> oo (1升)
ip <u>po</u> n (1本)	ik <u>ka</u> n (1巻)

音韻論はまた、このような個々の語の環境による発音変化に対してもどのような環境においてどのような音変化が起こるかということを明確に記述・説明できる理論的枠組みを確立しなければならない。

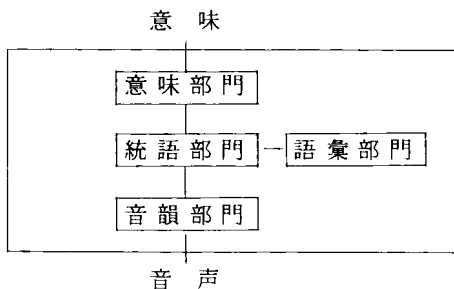
以上のように、音声学が対象とする言語音の類似・相違は音韻論においても中心課題となっている。また、環境による音変化を理解、説明するためには、音変化に関わる言語音そのものの音声学的知識が不可欠である。従って、「音声学」と「音韻論」と言えばあたかも2つの独立した学問分野のように聞こえるが、実はこれらは密接な関係にあり、一方を理解するためには他の一方の知識が必要である。本書が「音声学」と「音韻論」の2部から成るのもこのため

である。

2. 文法における音韻論の位置

文法とは音声と意味を関係づける機構である。我々は頭脳に内在するこの文法機構を駆使することによって、意志や情報を音声を通して他人に伝えることができ、また他人の発話（つまり音声の一連の流れ）を聞いてその意味を理解することができる。本節では文法全体を対象とした文法理論の中に占める音韻論の位置を略述するとともに、音韻論と文法理論の他の分野（つまり統語論、意味論、および語彙論）との関係、並びに各論に共通する方法論について述べることにする。

まず、文法機構は互いに関連するいくつかの部門から成っていると考えられている。これらの部門および部門間の関係は次図のように示すことができる。



〔図1〕 文法の機構

文法機構の片方には**意味部門**があって、これは意味と直結している。もう1つの端には音声と直接に関係する**音韻部門**がある。これら2つの部門は**統語部門**の媒介によって関係づけられている。統語部門はまた**語彙部門**とも直接関係を持っている。1つの言語に使われる個々の語はそれぞれの特質を明示した形で語彙部門に納められている。つまり語彙部門は言語の辞書のようなものである。